
マクスウェルウィザード 3人パーティー

グランドリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マクスウェルウィザード 3人パーティー

【Nコード】

N2650Y

【作者名】

グランドリオン

【あらすじ】

やんちゃでヤンキーな幼なじみ、さらに凜としてて綺麗な幼なじみの2人が隣に住んでいる、普通なんだろう高校生 松山 彰が入学した高校で出会ったのは。

この作品は前の「マクスウェルウィザード ～3人の反乱!～」を書き直した物です。そして作者の練習用に使っています。

0話（前書き）

最近ひたすら忙しいけれどかなり眠い俺、グランです。2作品目の小説ですが前作と比べて進歩がないという・・・汗
まあすごく温かい目で見てやってください、ではどうぞ。

0話

「熱いよお!」

白金色の髪を持つ小柄な女の子が焼け野原じみた状況下で叫ぶ。

「だれかあ!」

それでも誰も何も答えない。

「もう痛いのに耐えられなかったんだあ、でもみんなを攻撃したいなんて思っていないのになんて!」

一人でのつぶやきだけが辺りに響く。

そして少女は体を風へ、そして上空に舞う。

鉄くずの残骸や何人もの死体。白衣を着た者、スーツを身に纏う者そして少女と同じぐらいの子供が数百と。1日にして最凶の殺人者へと果てた。

「誰かつ、いるのか?」

もう一人ボーイッシュな女の子が白金色髪の少女へ近づく。

「うわあああああ、一人じゃ寂しかったーっ!」

互いに体を寄せ合う。

「・・・生きてた人・・・いたんだ。」

さらにもうひとり身長が他の2人に比べ遥に高い少女も体を寄せ合い、

ただ今も続く爆発音の中で3人は抱き合う。

3人の足下に一枚のチラシが飛び込んでくる。

『7月28日第10回明水市民バスケットボール大会参加チーム募集中』と。

Day of 21 August

1話(前書き)

2話続けての投稿です、ああ眠い・・・()
。
。() y -

1話

前はスポーツでの世界。

この世界ではどんなものが視れるのだろう。

~~~~~

さて、これから自身初の高校生活が始まる。

っていつときやっぱり気持ちが一新されるといっつかこれからやるぞ

！とみんな思っわけだ。

かくいう俺、実非松山彰もこれから高校に行くことになったんだが。

「ネクタイ結ぶのって難しいな。」

中学の時には無かったタイに苦戦してる。

「早くしないと遅刻するよー！」

「はいよっ。」

母親に適当に返事をして部屋を出る。

ズボンが少しユルユルなんだな、ずり下がらなきゃいいけど。

「飯っ飯っ！」

「立って食べない！」

こっちは腹減ってるんだよ、ってゆーか時間がベリーナッシング！

「じゃー行ってくるわ。」

「灯里ちゃんと蒼ちゃん待ってるよー！」

「分かったつちゅーの。」

入学式まであと1時間ぐらいか、そろそろ急がなければ！

扉、オオオオオオープン！

「ん、遅えよったく。」

「悪い、ネクタイ結ぶのに時間かかったから。」

「前日とかにやっつけよ。」

この口悪い女は俺の幼馴染みかつお隣さんという間柄の町田灯里だ。まちだ あかり  
入学式なのにスカートの下に灰色のスウェット穿いていて上も制服  
ブレザーからちらちらとこれまたスウェットが見える。地毛の金髪

が目立つ。

「誰に言っただあ？」

「知らね。」

適当にスルーする。

「じゃー行くか。」

「早く行こう、遅れたらはずかしいじゃん。」

この優しい口調で美人な少女は灯里の双子、町田蒼まちだ あおいだ。

この子は、スウェットじゃなくスポーツウェア着てる。何せ中学の時にバレーボールやっていて高校でも続けるそうだ。灯里とは違い黒髪のポニテ。

ムフフ、ゲフンゲフンちなみに俺の好みはショートカットだがな。

まあいいやとにかく行くぜ！

家から歩いて20分にある、これからたぶん3年間(たぶん・・・?)通う県立萌黄高校についたぞこのヤロウ！

ちなみに俺たちが通っていた中学は高校の目の前にあるから別に新しい通学路を通るわけじゃねえから、

新しいコンビニとかコンビニとかには寄れないのだ。

せつかく高校生になったから帰りにどっか寄り道したかったのにーシヨボーン。

「よし、入るとする・・・か・・・」

校門をくぐるうとした時、反対側がなにやら騒がしい。

そう思っただ騒ぎがある方向へ顔を剥ける、違う向ける！

「何があんだよ？」

「どうしたの？」

ほらほらなんか入学式の日騒ぎがあるってなんかヤバくなってる人に言おうとして、

騒ぎの中心にいる3人の少女を見た。

ふおおなかなか顔面偏差値高いじゃないか、高校来てヨカッタアアアアー！

「彰、にやけてんじゃねー。っーか凄いなあの3人。」

「絶対に目立つよね。あれって染めてるのかな？」  
なるほど、一番ちっちゃい子が金、というか白金に染めているのが分かる。

その他2人も、何故か制服の袖が左右2つずつありぶらぶらさせていたり、以上に身長が高い(たぶん185は絶対あるぐらい)という目立つトリオだ。

でも両親が周りにいないな。あとから来るのかも。

「ちつつ、金髪キヤラはウチだけで十二分なのに、あんにやる。」  
とか隣で灯里がぶつぶつ言ってるのをこれまたスルーする。

つとココの高校は結構綺麗だな。まだつるつるって感じがするぜ。  
昇降口に張ってあるクラス表を見てみるか。

「んーと、松山松山つと。」

おつ、灯里としかも蒼とも一緒のクラスでしかも出席番号も蒼の次じゃん。楽しくなるなーこれは。

「なんだ彰と一緒にあ。」

「なんだとはなんだってー!?俺嫌われてるのか?蒼。」

「たぶん同じクラスに4連続だったから、またかーみたいに思っているんじゃないのかなって私は思うよ。」

「そっかそーか。」

まあさすがに4連続同じクラスにはあんまりというかすぐくならな  
いと思うんだがな。蒼とは3連続だし。

「行こっか、4組に。」

さて、この高校は1年生の教室が4階にあるのかよ。大変だよいると。

やっぱり高校の教室は広いなつと、前から3番目か俺の席は。

前の席はつと灯里と蒼か。

「よっ。」

なんとなく言ってみたが。

「.....」

灯里反応なし!スルーじゃなくてなにか気持ち悪い物をみたような



顔で俺の顔を見てきたよ！

何故に！？

「うん、おはよう……。」「

蒼はなんとか反応してくれたが苦笑中。クッソオオオオ！

「ココじゃー4組は！」

「あり……。がと……。」「

「速いよう〜疲れたよお。」「

ん、後ろ側から誰か来たみたいだな。声からすると女子か。グヘヘ  
へ……。違う違う！

俺は振り向く。

「！！！」

校門近くであった騒ぎの中心の3人全員がいる！全員同じクラスか。  
・・楽しくなるな、どこるか騒がしくなるな。

「席どこだったっけっ？」「

「あそこだあそこ！てか間に合ったZEE！」

「……。うん。」「

3人も俺の席の後ろかよお。ていうか何の騒ぎ起こしたんだろう？

「おらおら席に着け！」

担任が来たよ……。ってか腹回りヤバ！メタボじゃん完璧。

確かに手に持ってきたのはメタ簿じゃなくて出席簿だな！我ながら  
らうまい。

「入学式の体育館移動がすぐあるから準備しろ。番号順に2人ずつ  
に列作って並べ。」「

そう言いながら歩くもんだからボヨン……。クラス中失笑。

「じゃ行くか、こーいう話ドライなあ。あーサボタージュしてえ。」「

「入学式と、あと卒業式ぐらいはおとなしくしておいたほうがいい  
と思うよ。」「

「ってゆうか2人もスウェットとか脱いでいった方がいいんじゃないか。」「

明らかに先生に目付けられると思うぞ。まして灯里は地毛とはいえ

金髪に灰色スウェットつてもはやヤンキーじゃん！ここの高校のレベルはまあ普通、よりちょっと上かなぐらいだ。

「じゃあ脱いでおくれ。」

蒼って素直だよな。性格良いし、体系も良いし、中学ん時に結構告られていたが全員振った。

何故か。

「・・・ヤダ。」

「なんでやん!？」

「今日はちよつと寒いじゃねえか、スカートとかヤダし。」

「ちよつとぐらい我慢し「アア?嫌なんだぞ、女の子は寒いのが。」

まあ、そうなのかな。どーでもいいや。(説得放棄、主に面倒くさい)

灯里は時々子供っぽいし意地っ張り、昔よりかは大人になったと思うんだよな。

「並びに行くぞ。もうほとんど並んでいるぞ。」

確認できたのは数人。たしか体育館履きはいらないうと。

行くかっつ。どうやら列の隣は蒼じゃないのか。

「よっ、こんちは!」

「あ、ああ。」

さっきの騒ぎ中心グループ3人(略してSCG3と名付けた!)の内の一人名。

肩に届くか届かないかぐらいのショートカット、少し色黒で身長はまあまあかな。陸上とかやっていそう。初対面の人に「よっ」って。

・・・

しかもやっぱり余分な袖がぶらぶらしてるしすこし気になる木。

「あのさ、その袖、何に使うの?」

「んっ、これは秘密だぞ気にすんな。」

「うーん。」

まあ、はあ、なんか疲れた。

ってかなんで、腕組んでいるの?知り合っただばかりなのに。

「うらあ、恥ずかしーだろ？へへへっ。」

「いや、意味訳分らないから。もうすぐ体育館に着くし。」

「隣に座るんだからいいじゃねんかボクと。んんっ。ちよっと離れてて。」

「あ、うん。」

なんなんだ。腕組んだり離したり。

「・・・んんっ・・・んんっ。」

肩の辺りで何かごそごそしてるみたいだな。もしかしてブラがはずれ、ゲフンゲフンなことあるかボケエ！

「もうあんまり使えないかな。」

「何が？」

「ううん、なんでもねーえ。」

くそ笑顔が眩しすぎて直射できん！

そして体育館に着いたぞ。人いっぱいいるし。しかもまた腕組まれたし。

「これからよろしくな。」

「おうつ任せとけん！」

さて、俺の高校生活はどーなるんだか？

## 1話（後書き）

次の更新の日程は今んとこ未定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2650y/>

---

マクスウェルウィザード 3人パーティー

2011年11月6日01時04分発行